

## 旧李王家東京邸の文化財的価値について

旧李王家東京邸は、1階に公的空間、2階に私的空間をわけける平面構成を備え、内外に洋風の意匠を施す旧皇族の邸宅に見られる典型的な構成及び意匠を採用しており、建築史上の価値が高い。とくに平面構成は、東伏見宮邸(大正14年竣工)、秩父宮邸(昭和2年竣工)、高松宮邸(昭和6年竣工)、朝香宮邸(昭和8年竣工)などと類似性が認められる。また、謁見室(謁見所・謁見之間)は、一般の住宅には見られない皇居や御用邸に限り見られる部屋である。

一方、旧皇族邸宅の典型例でありながら、意匠面で独自性も有している点にも、この建物の価値が認められる。例えば、イギリス・チューダー様式を基調とした装飾を用いる内外の意匠は、明治期の古典主義の洋風建築や他の旧皇族の邸宅とは異なっている。また、「ねじり柱」を多用した室内や2箇所ある「サンルーム」も、他の旧皇族の洋館には見られないこの建物ならではの特徴である。この建物の意匠にみられる独自性は、設計の主担当となった建築家の作家性が表れたものと考えられる。建設時の史料から、設計は宮内省内匠寮で、工務課長として牽引した北村耕造と、技師として多くの建物の設計に関与したとされる権藤要吉のコンビが担当したことが明らかである。

竣工当時の意匠や形態がよく保存されていることは、この建物の価値をいっそう高めている。特に主要諸室や各階段室の内装は創建当時の面影をよく留めており、木造クイーンポストラスによって形成されている急勾配の屋根も、内部の構造体からスレート葺き、飾り金物を含め、よく保存されている。(後藤治 工学院大学教授)

## 建物の由来

この建物は、明治43年(1910)日本の皇族となった朝鮮王朝・李王家の東京本邸として建てられた建物です。ここに生活していたのは、最後の皇帝、純宗の皇太子李垠(1897-1970)殿下と妻である梨本宮方子妃のご家族です。当時、皇族の住まいを一手に引き受けていた宮内省内匠寮により設計され、清水組(現・清水建設)によって施工されました。竣工は、昭和5年(1930)です。

戦後、西武鉄道に売却され、昭和30年(1955)、客室数35室で赤坂プリンスホテルとして開業しました。昭和58年(1983)、新館の誕生以降は、宿泊施設の役目を終え、主に婚礼施設やバー・レストランを中心として利用されてきました。

平成23年(2011)東京都の有形文化財(建造物)として指定されました。

## 建物の概要

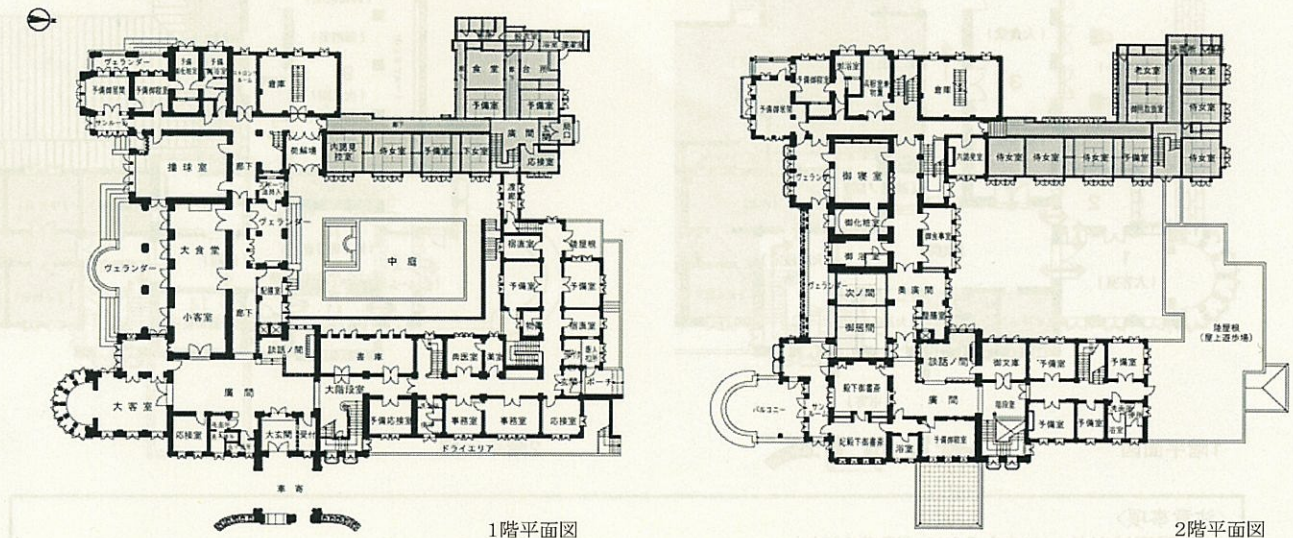
-鉄筋コンクリート造(木造小屋組) スレート葺

-地上2階塔屋付 地下1階

屋根は切り妻のドーマーウィンドウを取り付けた勾配のある寄棟に、尖塔の組合せとなっています。外観はイギリス・チューダー様式を基調とし、車寄開口部や階段室ステンドグラスに、様式の特徴である半円を少し押潰したようなチューダー・アーチが見られます。内装は、大客間に古典主義の柱型とイオニア式柱頭が用いられている他、網代天井が用いられるなど、多様なデザインが混在しています。

竣工当時の全体構成は、中庭を囲む口の字形の平面プランを持ち、東側を入り口として南側1階に大客間、食堂等の来客諸室、2階に書斎、寝室、居間等の私室を配置していました。正面玄関を挟んで北側には事務諸室が並び、西側には木造の侍女部屋(現存しない)が配置されていました。また、地下は厨房及び設備室として使用されていました。

## 竣工時平面図 (灰色部は、現存せず)



## 今後の保全整備について

ホテル開業以来、運営に合わせて維持・保全を行ってまいりました。この度、東京都有形文化財の指定を受けたことを機に、再整備を行う予定です。創建当時の姿・意匠を尊重し、その歴史的価値を維持しつつ、新たな時代の中で永続的にその魅力や価値を増し続けることを目指し、事業を進めてまいります。